

三六災害から60年、 よみがえった伊那谷。



60年を経ることで、かつての被災地も災害の痕跡を見つけることが困難になりつつある。

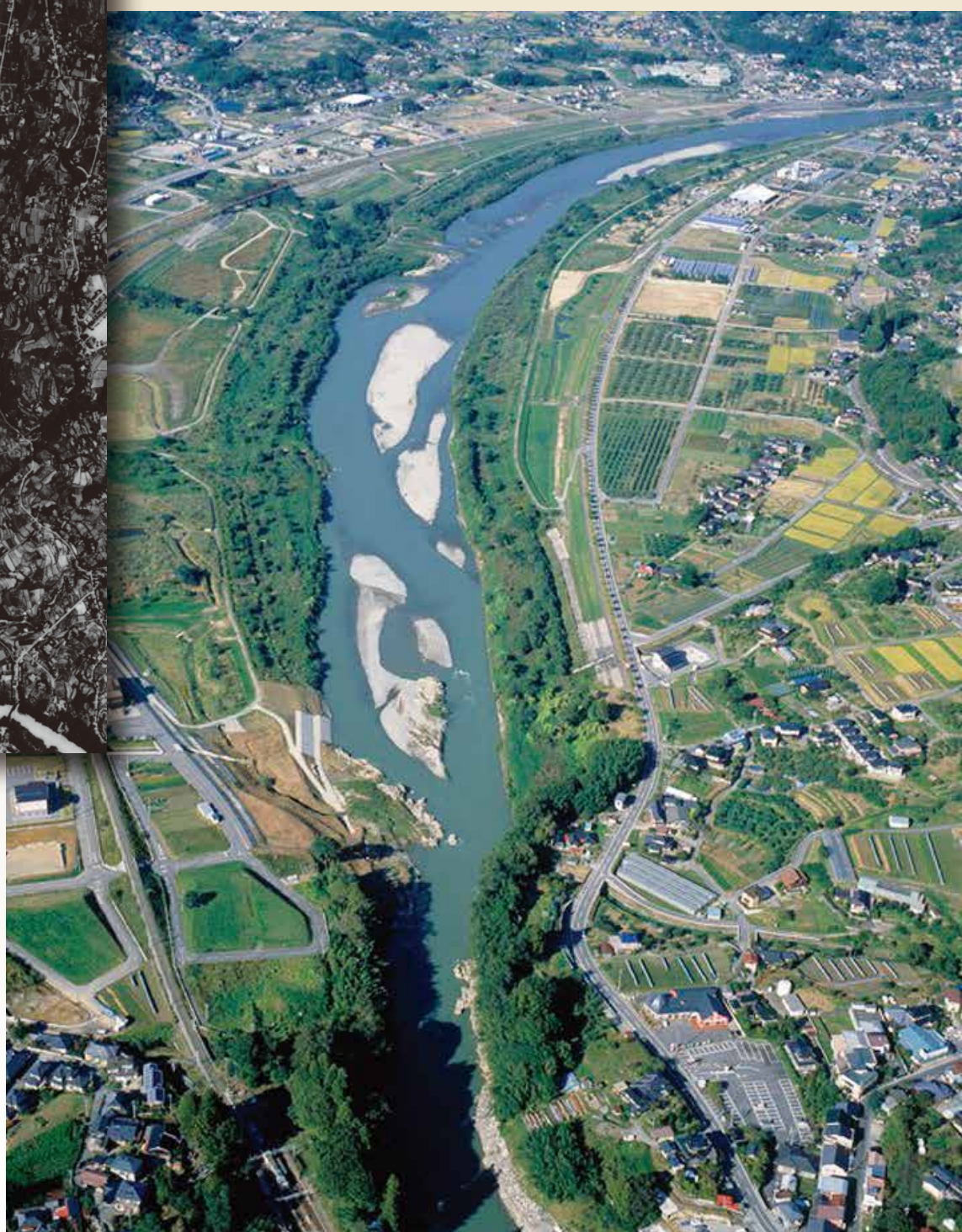
先人達は宿命といえる土砂対策に終わりのない挑戦を続け、地域の人々の懸命な努力と中央自動車道の開通や生活道路網の整備等によって地域は繁栄し、よみがえりました。しかし、伊那谷は災害との戦いの歴史だったことも忘れてはなりません。私たちは過去の災害経験を継承し、先人達の戦いの歴史を学び、「安全なまちづくり」を考え、進めていく必要があります。

飯田市 川路・龍江・ 竜丘 地区

現在、飯田市川路・龍江・竜丘地区は全面盛土方式によって安全な土地となることで、企業の進出や宅地化が進み、天竜峡エコバレープロジェクトなどの企業立地も始まっています。



災害直後の川路・龍江・竜丘地区の被災状況

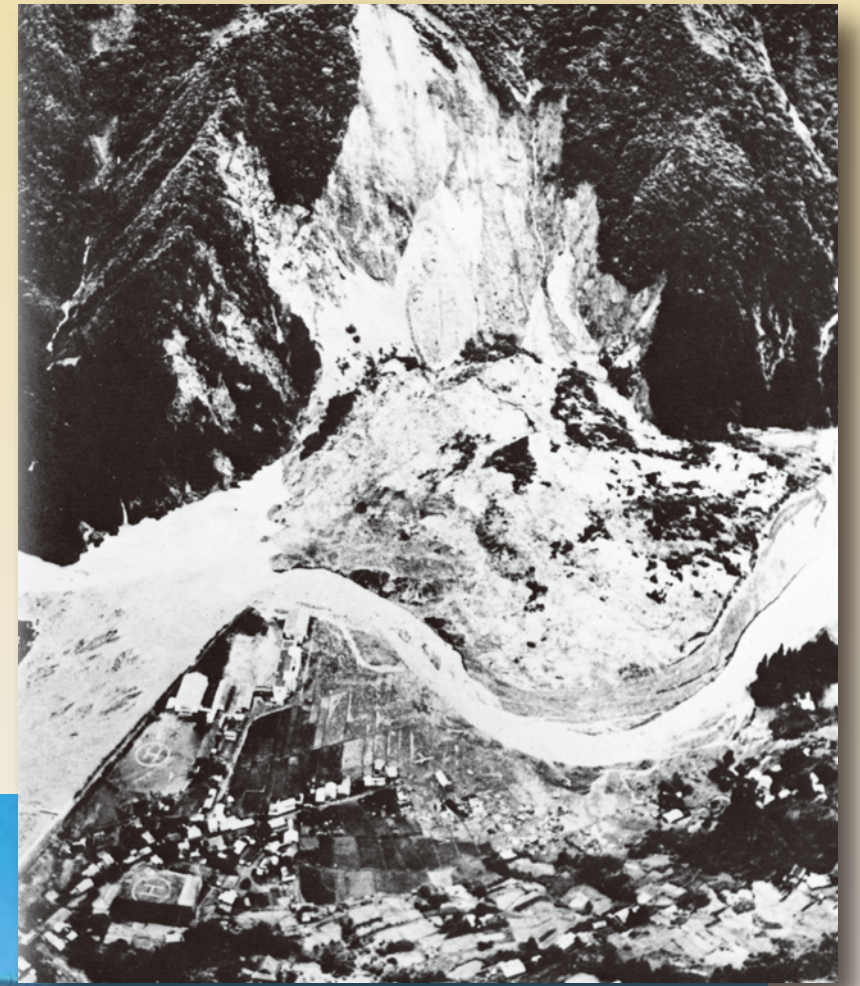


川路・龍江・竜丘地区治水対策事業の整備状況

下伊那郡 大鹿村 大西山 地区

大西山の大崩壊現場
中日新聞社 提供

昭和36年(1961)の災害箇所も、現在は桜公園として整備され、人々に親しまれています。



大西山(大西公園)の現況

伊那・伊北 地区

昭和57年(1982)より河川改修に着手し、堤防の引堤や河道の掘削などの改修工事が進められ、伊那・伊北地区は治水安全の向上が図られてきました。近年は企業の進出等によって経済活動も活発になってきています。



伊北Ⅱ期改修引堤前の状況
(辰野町宮木)



伊北Ⅱ期改修引堤完了後の状況(辰野町宮木)

駒ヶ根市 新宮川

新宮川、百々目木川を中心とする駒ヶ根市における三六災害の被害は、死者5名、家屋流失119戸、被害総額約31億円などその惨状は250年来の災害といわれました。河川改修による復旧はされていますが、堤防沿い低平地の住居地からより安全な河岸段丘上部への移転も見られます。



新宮川の合流点付近の氾濫(駒ヶ根市中沢)



新宮川の合流点(駒ヶ根市)